「死をめぐる諸問題の研究」報告

高橋隆雄・田口宏昭
慶田勝彦・佐谷秀行

「死」に関わる諸問題は、現代では脳死、安楽死の問題として生命倫理においてさかんに論じられているが、「死」は古来、哲学や倫理、宗教の主要なテーマのひとつであった。それはさらに文化一般の基盤をなし人類永遠のテーマでもあり、異なる分野の研究者による討論によって、その根の深さと広がりを把握することができると考えられる。

そのような見通しのもとに計画された本プロジェクトは文系と理系の研究者による共同研究プロジェクトであり、アポトーシス、魂や葬送に関わる儀礼、安楽死の是非といった「死」をめぐる諸問題を参加者間の討論を重ねることで究明していった。

それぞれのテーマ（最終原稿の題目）と研究内容の概要は以下の如くである。

・「安楽死について—日本的死生観から問い直す」（高橋隆雄）

これまで安楽死は、キリスト教的死生観と近代以来の自由の観念を中心とする欧米由来の枠組みで論じられてきた。これに対して、日本の伝統的な死生観から安楽死を問い直すことで、単に枠組みを欧米から日本へと移行させるだけでなく、普遍的観点からの議論が可能になることを示す。

・「自然葬と現代」（田口宏昭）

近年日本で急速に関心を集めつつある自然葬（山野、樹木、海への撒灰、撒骨）について、その歴史と現状を把握するとともに、現代における日本人の死の観念の変容を社会学的観点から考察する。

・「受取人不在の死—水俣の魂と儀礼・口頭領域」（慶田勝彦）

水俣から打瀬船で死者の魂を東京に運ぶという儀式に対するさまざまな反応を例にとりあげながら、近代の人間にとっての魂や死の儀礼の無根拠性を述べつつ、魂に関わる実践の構造を捉える。

・「細胞における死の流儀と意義」（佐谷秀行）

外傷等による細胞の破壊ではなく、細胞がいわば自殺のようなしかたで死ぬアポトーシスという現象が、個体や種の存続に果たす大きな意義を考察することで、生のみならず死も進化の過程の推進に大きな役割を担っていることを示す。

共同研究の活動について具体的に述べると、まず各自のテーマについて発表と討論を行い、それに基づいて修正したものを次の会で発表し討論するという形式で計6回の討論会を開催した。学会での討論とは異なり他分野の研究者との議論は、はじめのうちは噛み合わない面もあったが、次第に互いを隔てる垣根も取り払われ、自らの研究の立脚点を反省するうえで大いに意義あるものであった。多忙な中をかなりの時間と労力をこのプロジェクトに費やしたが、こうした相互批判を通過することによって、各自のテーマに関してより深くより広い視点からの理解を形成することができた。また、文

系と理系の研究者による共同研究は、現代の科学を含めた文化全体における「死」の意味についての思索を大きく進展させるものであった。

本プロジェクトの研究成果は、他に4名の執筆者を加えて単行本（田口宏昭・高橋隆雄編『よき死の作法』熊本大学生命倫理研究会論集4　九州大学出版会）として今年度末に刊行される予定である。